

2020. 9. 20. 聖霊降臨節第17主日礼拝式説教

ルカ福音書講解説教

聖書：ルカによる福音書13章18-30節

『狭い戸口から入る』

主イエスがエルサレムに向かっていかれる途上のことでした。一人の人が主イエスのもとに来て、こう尋ねたのです。「主よ、救われるものは少ないのでしょうか」。どういう思いでこの人がこの質問をしたのかは、わかりません。しかし主イエスが語り、歩む中で数えきれない人々が主イエスの周りに群がった。確かに主イエスを見よう、聞こうとする人は多かったけれど、実際神によって救われるのは少ないのでしょうか、という人々のうちにある疑問をこの人は代弁していたと言えましょう。

すると主イエスは「狭い戸口から入るように努めなさい」といって語り始められる。「言っておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ」これを聞いて、人々はどう感じたのでしょうか。

マタイによる福音書の7章には主イエスの大変有名な言葉が記されています。「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見出す者は少ない」。マタイでは狭い門、ルカでは狭い戸口。共通しているのは、狭い入り口から入ることです。そうでない入り口、広い入り口、広い道、そこから入る人は多い。

狭い門、狭い戸口、それはいったいどういうことなのでしょう。狭き門という言葉は受験シーズンになるとよく聞く言葉ですが、それは競争相手が多くて、入るのが難しいという意味でしょう。しかし、ここで言われる狭い戸口とは、そういう意味でないことは明らかです。

さらに 25 節からは、戸口は狭い広いということではなく、閉まってしまおう、という話に移っていきます。開けてくださいと言っても開けてもらえないということになる、という話になっていきます。

狭い入り口という言葉で主イエスが何を語ろうとしておられるのか。一つは、狭いということは、みんなと一緒に入る入り口ではない、ということです。夫

婦であろうが、友人であろうが、だれであろうが、仲良く手をつないで、という話ではない、ということです。自分が神と向き合って、神の呼び声を聞いて、自分が神に応答して、入っていく入口だということです。代替不可の入り口です。信仰は、教会に連なる共同の信仰であるのと同時に、わたしが招きに応じて歩むものだというのを、この狭い戸口は指し示していきましょう。

さらに、狭い戸口ということで主が語ろうとしておられることは、神の呼び声に聞いて歩みだしていくときに、自分の願いや希望とは違っていても御声に聞いて歩み続けていく、ということです。わたしたちは自分の願いや希望に何らかのこだわりを持っているでしょう。信仰とか宗教というのは、自分の願いや希望を願うことだと思っている人も少なくないのですから。

けれど、自分の希望や願いに沿って求め続けていくのは、広い道を歩いていくことなのではないか。ここでキリストが言われる狭い戸口とは、たとえ自分の希望や願いとは違っていても、主の導きを信じ、主が共にいてくださることを受け止め、主のみ言葉に聞いて歩む、それが狭い戸口から入ることなのです。なぜなら、狭い戸口とは自分の我を全部抱きかかえては、通れない狭さの戸口だからです。

わたしたちが人生を歩むというとき、自分以外の声に聞いて、歩むことは少ないでしょう。友人の声や、親の声や、同僚の声、先輩の声、書物から聞こえる声、自分の中のもう一人の自分の声、いろいろな声がわたしたちに聞こえてくるでしょう。しかしその中で、イエス・キリストの声に聞いて生きるということは、自分の願った時だけ、自分が聞きたいと思った時だけ、自分の都合のいいときだけ聞く、という聞き方ではない。持続的、日常的に聞くということ、自分が願わない時も、聞きたくないと思うような時も、聞くことなのです。自分の心の動きにかかわらず、どんな時もキリストの声に自分を晒しておく、ということです。自分の生活の場所にキリストの言葉がいつも在る状態にする、それが狭い戸口から入るよう努めるということなのではないか。

家の主人が立ち上がって戸を閉める時が来る。その時あなたが外に立って戸をたたき、開けてください、と言ってもお前たちがどこの者か知らない、との答えが返ってくるだけだ、とあります。

戸を叩いている本人は家の主人とも一緒に食事もし、食べたり飲んだりもし

た。広場で主人の教えも聞いた。だから当然、自分は中に入れてもらえると思っていた。ところが主人の応答は、お前がどこの者か知らない、というものだったのです。

ずいぶんと厳しい話だ、と思って聞いている人もいるでしょう。自分としてはイエス・キリストの教えを聞き、それなりに交流し、聞いているつもりだった。聖書も時々開き、それなりに聞いてきたつもりだった。模範的とは思っていないけれど、自分もクリスチャンの端くれだとは思っている。ところが主人は重ねて言う。「お前たちがどこの者か知らない」。

主イエスのこうした話には特徴的な点があります。それは、この話で「お前たちがどこの者か知らない」、「外に投げ出される」、ということが強調点なのではない、ということです。キリストがここで語ろうとしておられるのは、だから、そうならないように、あなたも狭い戸口から入るという歩みへと進んでいきなさい、ということです。もしあなたが狭い戸口から入ろうとしないのなら、扉は閉められたままになってしまう。だから、狭い戸口から入りなさい、そう主は語り開けておられるのです。

ルカ福音書12章には、主人の帰りを「目を覚まして」待っている僕のこと語られていました。13章には悔い改めるという生き方が語られ、実を結ばないイチジクの木を見守ってくださって園丁のことが語られていました。これらはみなばらばらのことなのではなく、今日の聖書個所につながる言葉なのです。

イエス・キリストはわたしたち一人一人を招いておられる。また一人一人を愛しておられる。十字架の愛はわたしたちに与えられている。しかしそれを受けて、その応え、キリストと共に、キリストの声に聞き続けて生きるということにおいて、目を覚ましている生き方、神の前で悔い改める生き方、自分では実を結ばないものであっても、キリストにつながることによって実を結ばせていただく生き方、狭い戸口から入る、という生き方へと、導かれ、招かれているのです。

キリストというお方の声に生涯聞き続けていく。ずっと聞き続けていく。倦(う)まず弛まず聞き続けていく。それが狭い戸口から入るという生き方です。

狭いというのは、いつもキリストの言葉に帰ってきて、キリストの言葉から歩みだしていく、その基点をあらわす言葉でもあります。それは世界にあまたある言葉の中で、キリストの言葉という一つの狭い入り口を必ず通り、またそこから出ていく、そういう生き方のことなのです。

主イエス・キリストの言葉を聞いて、自分にはとてもできない生き方への転換を迫られていると思う必要はないと思います。キリストは大仰なことを言っておられるわけではない。ただわたしたちの心と体がキリストのほうに向きなおり、キリストの言葉を聞いて生きる、というところからいつも始めていく、なんどでも始めていく、そういう歩みを繰り返していくことが求められている。

今日の聖書箇所には最初に、からし種がまかれ成長して、空の鳥が宿るほどに成長すること、パン種を三サトンの粉に混ぜるとやがて全体が膨らむことが語られています。からし種というのは本当に小さな小さな種です。ゴマ粒よりも小さい。それが育まれて大きな木となる。

わたしたちがキリストのみ言葉に聞いて生きる、それはとても小さな業です。自分ではキリストの言葉に聞いていることがどんな変化を生み出しているのかわからない。しかし聞き続けて生きることで神は働いてくださり、豊か用いられていくのです。神の国というのは、そのようなわたしたち一人一人の小さな業、今日も主の言葉に聞いて生きるという小さなわざ、そこにこそ生きて働いていくものだ、と主は言われるのです。